Kashima-machi cultural assets investigation report Vol.10

Simorokka-Sites Loc.9801

Archaeological excavation of buried cultural properties due to widening of town roads

~Research organization~

Kashima-machi Board of Education Social Education Division

545 Uejima, Kashima - machi , Kamimashiki District,Kumamoto Prefecture, Japan

Kashima-machi Cultural Assets Center

531 Uejima, Kashima - machi Kamimashiki District,Kumamoto Prefecture, Japan

~Excavation investigator~

Yuji NAKAGAWA

~Editor~

Tsuyoshi HASHIGUCHI

2024

Printed in Japan

下六嘉遺跡群

嘉島町文化財調査報告書 第10集

2024 熊本県上益城郡嘉島町教育委員会

下六嘉遺跡群

9801 地点

Simorokka-Sites Loc.9801

町道拡幅に伴う埋蔵文化財調査報告書

嘉島町教育委員会

2024

嘉島町文化財調査報告書 第10集

下六嘉遺跡群 9801地点

町道拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査

○調査
中川裕二

○編集
福田剛士

嘉島町教育委員会
2024

9801 地点出土土製品

序

やがて平成２８年熊本地震から８年を迎えようとし、被災した家屋も新たな住宅に建ち変わり、災害に遭っても力強く復興の歩みを進める住民の皆様の姿に、嘉島町の更なる発展を確信しているところです。

本報告書は、平成１０年（１９９８）年２月嘉島東小学校西側を走る町道拡幅時に法面で甕棺が露出し不時発見に伴い実施した調査記録になります。

長らく町が保管していた資料ですが、町の東部に位置する東部台地土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査や平成２８年熊本地震を契機にして増加している個人住宅建設に伴う埋蔵文化財調査などの整理作業を進める中で、今回資料をご紹介することになりました。

東部台地土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査や個人住宅建設に伴う下六嘉遺跡群の調査でも弥生時代や古墳時代に関連する遺構や遺物が数多く発見されており、当報告書でご紹介する甕棺や古墳時代の土製品との関連も興味深いものです。さらに、嘉島町の最東部に位置するサントリーのビール工場建設の際に熊本県が調査された、二子塚遺跡で発見された弥生時代の環濠集落と併せて考察を深めると、弥生時代の嘉島町の姿に思いを馳せることができます。

最後に、文化財保護の趣旨を理解し、調査にあたりさまざまなご協力をいただいた関係者各位に厚く御礼を申し上げます。

２０２４年　月　嘉島町教育委員会　教育長　青木　政俊

例　言

1　本書は、町道拡幅に伴う遺跡の不時発見により実施された調査の報告書である。
2　本遺跡の調査は、嘉島町教育委員会が主体となり、熊本県教育庁文化課の協力を得て社会教育課が調査を担当した。
3　資料の整理は、嘉島町文化財センターで実施した。出土資料及び記録は、嘉島町文化財センター及び上島倉庫に保管されている。
4　本書の執筆・編集は橋口が行った。
5　土層及び土器胎土の色調を示す際には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を使用した。

作業において下記の方々に尽力いただいた。

○整理作業（敬称略）
嵐英隆　土田みどり　結城あけみ　前田和子　田中裕子　平川恵里子　緒方聡美
山田由美　岩下恵美子　吉田和子　森嶋ユリコ　石田敦子　溜渕俊子
高田由美　椎葉一代　岩野一子　大川好美　塩田喜美子　高田清香　宮守富子
山内洋子　永田清美

調査に際して以下の方から助言・協力をいただいた（順不同、敬称略）。

檀佳克　甲斐郁（八女市教育委員会）　小畑弘己　宮浦舞衣（熊本大学小畑研究室）

目　　次

第１章　調査の経緯と体制
　第１節　調査に至る要因及び推移　・・・・・・・1
　第２節　調査の体制　・・・・・・・1

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　遺跡の位置と環境　・・・・・・・2

第３章　調査の成果
　第１節　調査の方法　・・・・・・・4
　第２節　層序　・・・・・・・5
　第３節　縄文時代　・・・・・・・5
　第４節　弥生時代の遺構　・・・・・・・7
　第５節　弥生時代の遺物　・・・・・・・16
　第６節　古墳時代　・・・・・・・18

第４章　総括
　第１節　9801 地点の調査成果　・・・・・・・33
　第２節　まとめ　・・・・・・・35

図・表・図版　目次

図

第１図　嘉島町遺跡地図　・・・・2
第２図　下六嘉遺跡群及び 9801 地点位置図　・・・3
第３図　9801 地点調査区の位置　・・・・4
第４図　9801 地点土層柱状図　・・・・5
第５図　包含層出土遺物実測図（縄文時代）・・・6
第６図　遺構配置推定図　・・・・7
第７図　１号甕棺出土状況図　・・・・8
第８図　１号甕棺実測図　・・・・9
第９図　２号甕棺出土状況図　・・・・10
第 10 図　２号甕棺実測図　・・・・11
第 11 図　３号甕棺出土状況図　・・・・12
第 12 図　３号甕棺実測図　・・・・13
第 13 図　４号甕棺出土状況図　・・・・14
第 14 図　４号甕棺実測図　・・・・15
第 15 図　包含層出土遺物実測図（弥生時代・土器）・・・・16
第 16 図　包含層出土遺物実測図（弥生時代・石器）・・・・17
第 17 図　包含層出土遺物実測図（古墳時代・土師器）・・・・19
第 18 図　包含層出土遺物実測図（古墳時代・石器）・・・・20
第 19 図　アンケート結果　・・・・22
第 20 図　人形土製品実測図・オルソ展開図　・・・・23
第 21 図　人形土製品実測図・オルソ展開図　・・・24
第 22 図　土製品実測図・オルソ展開図　・・・・25
第 23 図　土製品実測図・オルソ展開図　・・・・26
第 24 図　土製品実測図・オルソ展開図　・・・・27
第 25 図　土製品実測図　・・・・28
第 26 図　土製品実測図　・・・・29
第 27 図　土製品実測図・オルソ展開図　・・・・30
第 28 図　土製品実測図・オルソ展開図　・・・・31
第 29 図　9801 地点出土甕棺編年図　・・・・34

表

第１表　縄文土器観察表　・・・・6
第２表　縄文時代石器計測表　・・・・6
第３表　甕棺観察表　・・・・15
第４表　弥生土器観察表　・・・・16
第５表　弥生時代石器計測表　・・・・17
第６表　古墳時代土師器観察表　・・・・21
第７表　古墳時代石器計測表　・・・・21
第８表　古墳時代土製品観察表　・・・・32

図版

巻頭　9801 地点出土土製品
PL. 1　１号甕棺
PL. 2　２号甕棺
PL. 3　３号甕棺
PL. 4　４号甕棺
PL. 5　上段左：縄文土器
上段右：弥生土器
下段：古墳時代土師器
PL. 6　上段：古墳時代土師器
下段左：匙形土製品
下段右：不明土製品
PL. 7　人形土製品
PL. 8　上段：動物形土製品
下段左：竪杵形土製品
下段右：鏡形土製品
PL. 9　上段左：鉢形・甕形土製品
上段右：器台形土製品
下段左：器台形土製品
下段右：土器形土製品

第1章　調査の経緯と体制

第１節　調査に至る要因及び推移

１　調査の要因

（１）調査の原因

本調査は、平成10（1998）年２月、嘉島東小学校裏を走る町道拡幅時に法面で甕棺が露出したことによる不時発見に伴うものである。ただし、経緯の詳細については文書等が残されておらず不明である。

２　調査の経過

（１）発掘調査の経過

調査記録についても図面以外は存在しない。そのため関係者からの聞き取りを行った結果、当時調査員を配置していなかった町が熊本県教育庁文化課に依頼し、熊本県の週日は別の調査現場に従事している調査員を週末に派遣して調査を実施したとのことであった。

（２）整理作業の経過

調査終了後図面を含む資料は県から町へ引き渡され、当時調査を担当していた調査員が当町へ入庁し、長らく保管されていた。

別事業の整理作業を進める筆者が収蔵庫の片隅に保管されている当該資料を発見し、洗浄等の作業を実施したところ甕棺のほか複数の土製品を確認するに至った。

折しも令和２年度に整理中であった下六嘉遺跡群の報告書中において速報的に一部の資料の写真とともに掲載し、その時点では図面の所在が不明となっていたが、その後別事業の図面と混在して保管されていたことが判明し今回の図面掲載に至る。

出土遺物については令和３年度に整理作業を実施、接合及び実測図作成等を完了した。これに併せて土製品に種子等が意図的に混入されているかについての検討を実施するため、熊本大学小畑研究室にＸ線ＣＴを用いた土製品の断層画像の撮影及び種子類の同定を依頼した。

第２節　調査の体制

体制について、発掘調査については当時の記録が存在しないため詳細については不明である。

【報告書作成作業】

令和３年度～４年度

調査主体	嘉島町教育委員会	
調査責任者	教育長	髙野隆
調査事務局	課長	増永貴士
	係長	園田ひろみ
会計年度職員		古城史雄
		水政みゆき
調査担当	技師	橋口剛士

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の位置と環境

1　遺跡の地理的環境

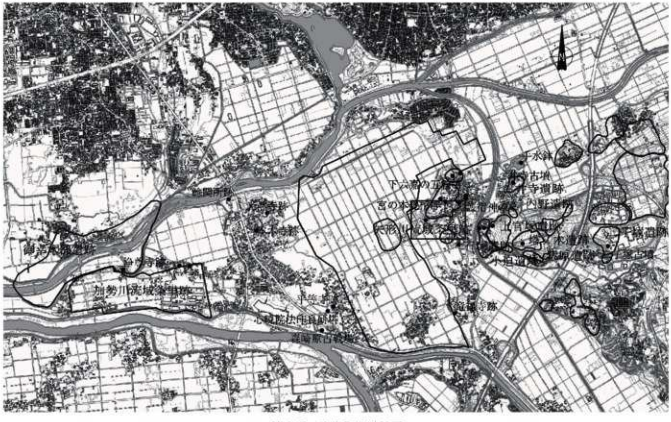
下六嘉遺跡群は嘉島町の東側、矢形川が南北に流れる付近にある北甘木丘陵・下六嘉丘陵のうち下六嘉丘陵の南西部付近一帯に存在する（第1、2図）。9801地点は、その中でも南西端に位置している。9801地点がある辺りが遺跡の境界となっているが地形を鑑みるにさらに南西側へ展開する可能性は否定できない。町道が入っているため分断された丘陵裾部が南西側へ延びるためである。

なお、地点付近を含む丘陵裾部は現在でも湧水し周辺の水田を潤している。こうした地理的環境が遺跡の形成に大きな影響を及ぼしていることは疑いようのない事実である。

2　遺跡の歴史的環境

本項に関しては下六嘉遺跡群1901地点（嘉島町教育委員会2021）で詳細を述べているので省略する。

嘉島町教育委員会2021「下六嘉遺跡群1901地点」『嘉島町文化財調査報告書』第7集　嘉島町教育委員会



第1図　嘉島町遺跡地図

第 2 図　下六嘉遺跡群及び 9801 地点位置図

第3章　調査の成果

第1節　調査の方法

1　調査区の設定

（1）調査区の設定

不時発見であったため調査区の設定については工事により影響を受けた範囲に留まっている。惜しむらくは正確な位置を記録できていない点であるが、調査の性質上やむを得ない部分もある。

（2）調査区の位置推定

調査時の写真や現在に至るまで現地にあるものからおよその位置を推定した（第3図）。なお現地はその後住宅が建てられており、その当時存在した畑への登り口は原形を留めていない。

位置については平面直角座標系（Ⅱ系）における

X：-27799.43

Y：-21899.69　付近であり、

緯度経度では

北緯　32度44分56.7273秒

東経　130度45分58.6711秒　と推定される。

2　記録の方法

個別遺構の実測図について断面図作成用の任意の基準点が設定されているものの相互の位置関係については判然としない。

調査区近景

第3図　9801 地点調査区の位置

第２節　層序

遺跡の層序

基本土層図は作成されていなかったので遺構実測図から柱状図を作成し、土層の注記も遺構図面からのものを援用している。

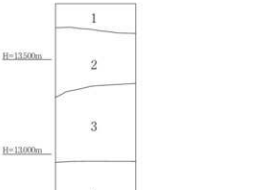
１層　耕作土
やや粘りを帯び破砕された土器片を多く含む。

２層　暗褐色土
表土よりも黒く、ニガ土片　（φ 10~20mm）を含む。礫の混入も見られるため、耕作による撹乱を受けていると思われる。
れる。

３層　暗茶褐色土
２層よりも褐色味が強く、しまっている。遺物を含む。

４層　黄橙色粘質土
地山と思われる。かなりベタ付く粘土。

基本的に火山灰土による丘陵性の堆積物で構成されている。１～２層は人為による改変を受けているものと推測され、３層が所謂ニガ土であると推定するのであれば、本来は３層の上にアカホヤ２次堆積層、クロボク土が形成されているはずであるが、耕作により開削されたため上層部分を失ったということであろう。



第４図　9801 地点土層柱状図

第３節　縄文時代

縄文時代の遺構は確認されなかったが、遺物が小片ながら数点出土している。時期も後期～晩期にかけてであり付近にあるカキワラ貝塚との関連をうかがわせる資料である。

１　土器（第５図）

１は磨消縄文の浅鉢であり、やや分厚な胴部に縄文を施し、斜位・横位の区画沈線で区切られた部分以外を磨り消す。

２は深鉢の口縁部で凹線による鉤状文の一部が見える。

３は深鉢の口縁部。４は深鉢の胴部であり、粘土紐を貼り付けて突帯を巡らし、棒状工具による連続した斜位の短い施文により綾杉状をなす。その後一部はナデ消す。内器面は一部に工具痕が残るものの全面ナデでいる。胎土に角閃石が多く含まれている。

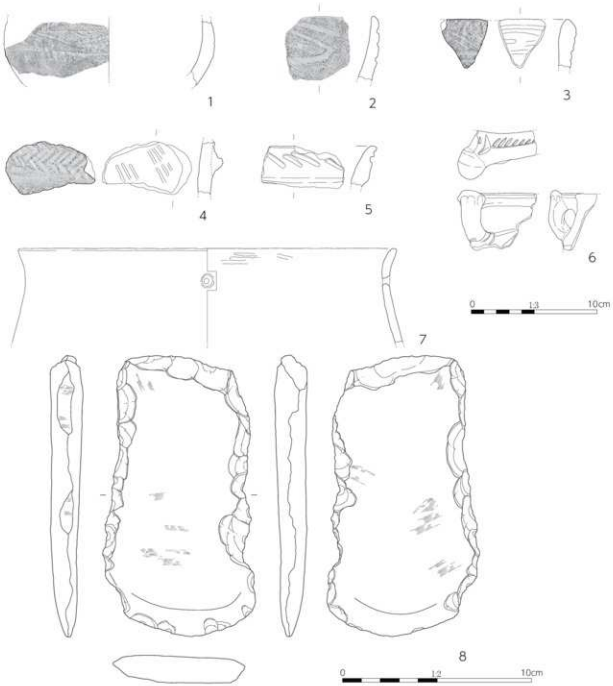
５は深鉢の口縁部であり、口唇部～口縁下部にかけて綾杉状の凹線文、その下部に区画線と思われる横位の凹線文が施される。

６は深鉢の口縁部であり、橋状把手含め口縁部直下への施文はほとんど認められない。胴部までは残存しないため不明ではあるが、境界付近における状態から凹線文が入る可能性はあるがそこまで複雑ではなさそうである。平口縁の口唇部においては連続した刺突文に加え橋状把手の辺りで大きく爪形文を刻む。恐らく把手の部分で対称的になるようにしたものであろう。

７は深鉢である。条痕をナデ消すほかは無文であり、内器面は口縁部付近にミガキが数条認められる。口縁部直下に焼成後穿孔による孔が一つ認められる。

２　石器（第５図）

８は磨製石斧である。大型で板状の安山岩を素材とし、縁辺部を打ち欠く。縁辺部位外は粗整形の際に生じる大きな剥離面等が認められず、元からこの程度の厚みである礫を原材としている可能性がある。刃部となる部分は研磨により貝殻状に整えられる。



第５図　包含層出土遺物実測図（縄文時代）

第１表　縄文土器観察表

挿図番号	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
1	－	一括		縄文土器	前期	鉢形	胴部	(4.4)		－	長石、角閃石、雲母	灰黄褐 Hue10YR6/2	灰黄褐 Hue10YR6/2	ナデ、曲線文	ナデ	良好	
2	－	－	1-3	縄文土器	前期	鉢形	口縁～胴部	(5.1)		－	長石、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	ナデ、回線文	ナデ	良好	
3	－	－	1-3	縄文土器	前期	鉢形	口縁～胴部	(5.8)		－	長石、角閃石、雲母、輝石土粒	にぶい橙 Hue7.5YR6/3	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	ナデ、沈線文	ナデ、ミガキ	良好	
4	－	－	1-3	縄文土器	前期	鉢形	胴部	(4.2)		－	長石、角閃石、雲母	灰黄褐 Hue10YR5/2	黒褐 Hue10YR3/2	ナデ、結束文	条痕文ナ	良好	條痕文
5	－	－	1-3	縄文土器	前期	鉢形	口縁～胴部	(3.2)		－	長石、角閃石、雲母、輝石土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	灰白 Hue10YR8/2	ナデ、刺突文	ナデ	良好	
6	－	－	1-3	縄文土器	前期	鉢形	口縁～胴部	(4.8)		－	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	ナデ、刺突文	ナデ	良好	口縁上部に刺突文あり
7	－	一括	－	縄文土器	前期	鉢形	口縁～胴部	(26.0)	(7.5)	－	長石、角閃石、雲母、輝石土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	灰白 Hue10YR8/1	ナデ	ナデ、ミガキ	良好	撚糸Ⅰｂ

第２表　縄文時代石器計測表

挿図番号	調査区	遺構	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
8	9801	－	1～2	磨製石斧	15.05	8.23	1.74	301.21	周縁部に打ち欠き

第４節　弥生時代の遺構

調査の性格上、限定された範囲で確認された遺構としては弥生時代の甕棺に限られる。甕棺は全部で４基確認された。ただし記録として写真が個別に撮影されておらず、詳細な状況については図面から判断できるもののみ記載する。

また、遺構配置図が作成されていないため、写真による位置関係から推定図を作成した（第６図）。

一つの問題点として、甕棺実測図に記載されている標高が13 m付近を指していることである。実際現在も残る畑地や宅地の平坦面と大きく変化がないと考えると標高地としては10 m付近であり、図面記載のその面から掘り込んだとすれば10 mよりも下となるため数値として疑義が生じる。ただし、これについては検証できないので原図記載の標高をそのまま採用する。

１　１号甕棺（第７～８図）

（１）出土時の状況

道路法面に面して確認された甕棺である。大型の甕と笠状の鉢を組み合わせた合わせ口によるものである。合わせ口部分には粘土により封がなされている。棺の設置として主棺である大型棺の方に土坑の広場的な部分があり、さらには主棺の方が上方に傾く傾向にある。

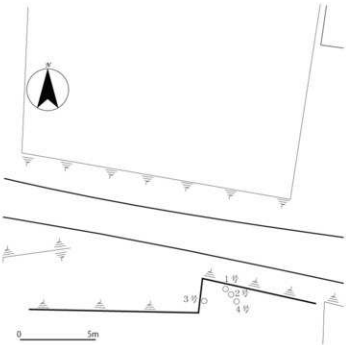
図から判断するに人骨片が確認されたとのことだが、土の流入によりほぼ全て溶けており、骨粉の状態であったと思われる。

甕棺埋土中から匙形、鏡形土製品などの土製品が出土している。断面図にも記載があったため状況を検討することが出来たが、埋土の中位に含まれているため、遺体に伴って副葬されたものではなく甕棺が破損し外部から土が流入した際に付近に含まれる遺物が巻き込まれたものと推定される。

（２）遺物の特徴

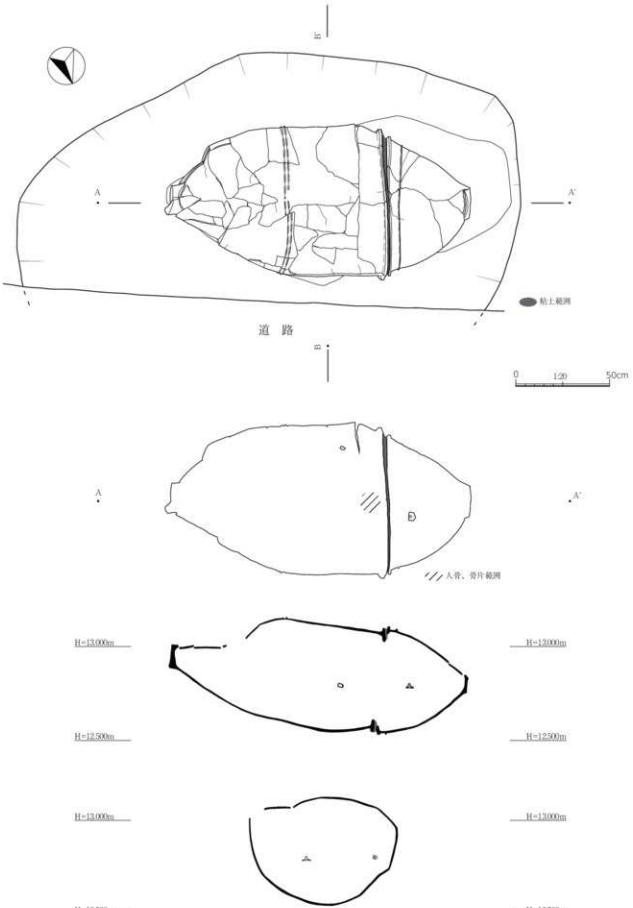
主棺となる大型甕（10）は高さ約110cmで肥厚する口縁は内径の方が高く外へ流れる形状のＴ字形口縁である。器高に比べて幅はやや狭く細長の形状を示す。最大胴部径よりも下位に二重突帯が巡る。

蓋となる鉢形（９）はＴ字形口縁で口縁下部に突帯が１条巡る。外器面調整は縦方向のハケ目のほか全体はナデ調整である。器形としては胴部が張り出してやや丸みを帯びており、直線的な笠形というよりは器にちかい印象を受ける。

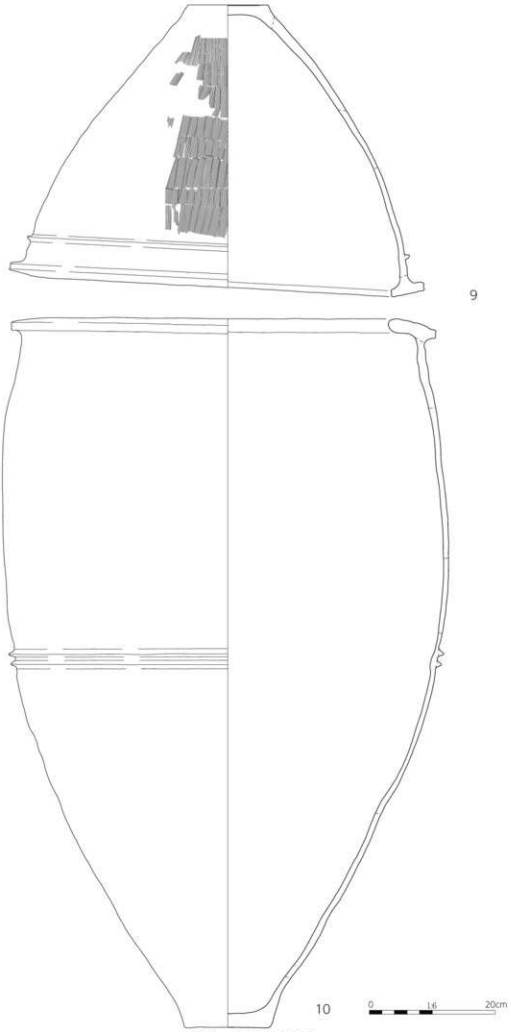


第６図　遺構配置推定図

遺構配置推定の根拠となる写真。正面に１号、隣り合うように２号があり、２号の左上に４号が見える。右手奥側に３号がある。右手に畑への登り口が写り込んでいるため写真は北側から撮影されたものと断定した。



第７図　１号甕棺出土状況図



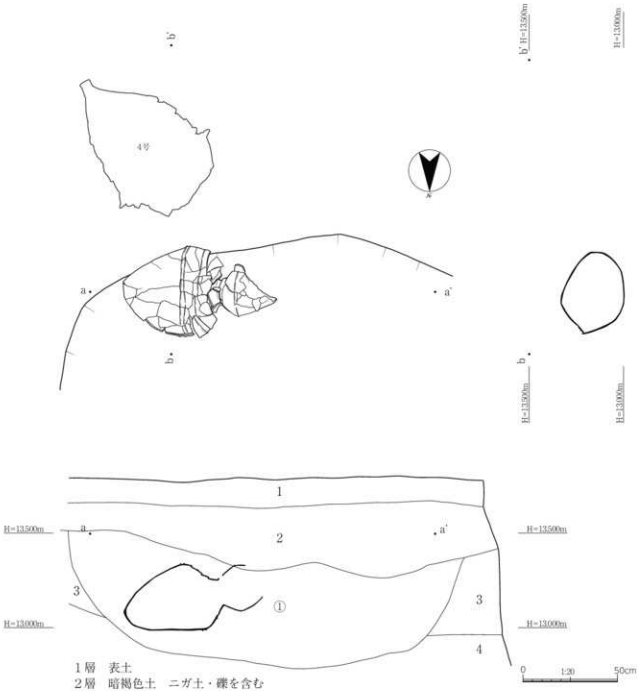
第８図　１号甕棺実測図

2　2号甕棺（第9～10図）

（1）出土時の状況

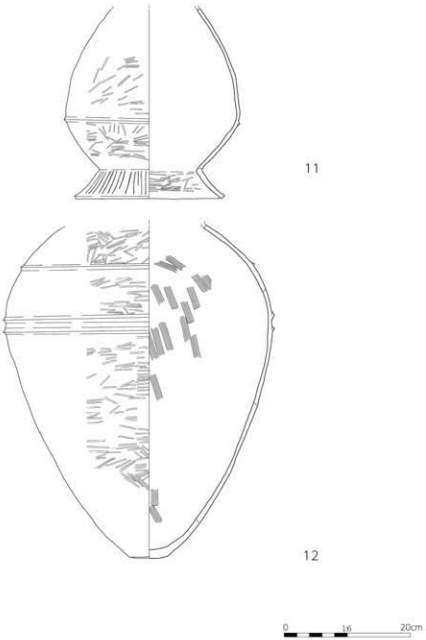
1号と同様、道路法面に面する形で確認されている。図面によると堀方の半分を法面により削平されているようであるが、甕棺が位置するのは土坑の端にあり上端にべったり貼り付くように配置されている。

通常このサイズの甕棺である場合土坑も小規模であることが多いため、誤認の可能性がある。断面図もこの甕棺に伴う土坑の大きさ、断面における甕棺の傾きから考えると疑問に思う点が多く、1号甕棺や4号甕棺との切り合いを誤認している疑いがある。他方、写真で判断する限り、1号甕棺と2号甕棺は1号甕棺の主棺底部で重なっているように見える。ただし4号



1層　表土
2層　暗褐色土　ニガ土・礫を含む
3層　暗茶褐色土　ニガ土
4層　黄橙色粘質土　地山。かなりベタ付く粘土。
①層　暗褐色土　3層をベースとしやや暗い理土。4層由来の土をブロック状に含む。

第9図　2号甕棺出土状況図



第 10 図　2 号甕棺実測図

甕棺との位置関係については図化されているものの、1号甕棺との位置関係については図化されておらず図面上で示すことが出来ない。そのため前後関係については不明とせざるを得ないが、近接しつつもお互いが破壊されない程度に重なっており、意図的に避けているようにも思える。

（2）遺物の特徴

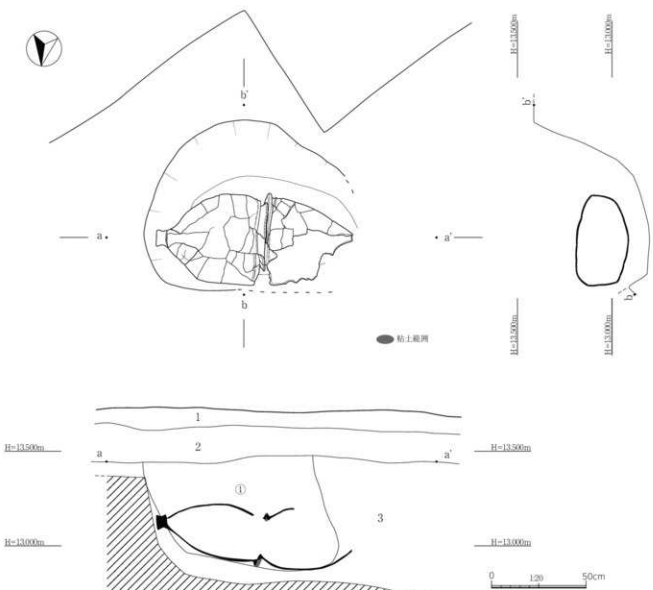
2号甕棺は、中型の精製甕（12）と小型の精製甕（11）を組み合わせたものである。主棺となる中型甕は肩～口縁部を打ち欠き、小型甕の口縁に合うようにしてある。器面調整は概して丁寧であり、胴部は横位のミガキ、肩部付近は斜位のミガキが施される。

一方小型甕も精緻な調整が施されており、最大胴部径を測る付近に突帯が1条巡る。外器面胴部は斜位、肩部は横位のミガキが施され、頸から口縁にかけて放射状の赤彩が施される。内器面も口縁から頸にかけて横位のミガキが施される。

3　3号甕棺（第11～12図）

（1）出土時の状況

1，2，4号甕棺は比較的近接した位置に固まっていたが、3号のみやや離れた位置にある。とは言え、全体的に見れば非常に近接した位置



①層　暗褐色土　3層をベースとしやや暗い埋土。4層由来の土をブロック状に含む。

第11図　3号甕棺出土状況図

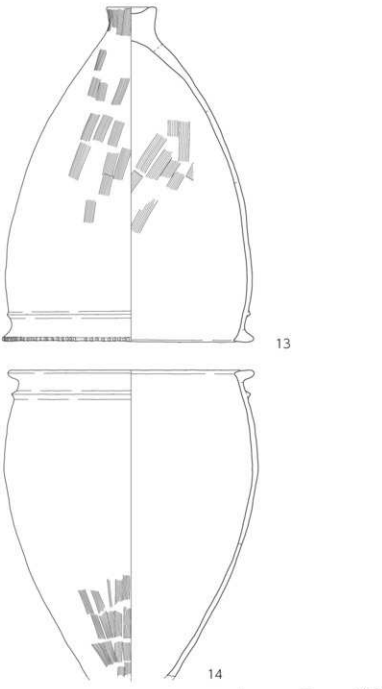
に４基存在したということは密集した状況にあると言える。

３号甕棺は、中型の甕同士を組み合わせたものである。土坑の形状及び甕の大きさ等で主副の判断が付きづらい。棺の傾斜具合で底部が残存する方が上方へ傾いているように見えるため、便宜的にこちらを蓋とする。

（２）遺物の特徴

双方ともに器形はよく似通ったもので、強いて言えば蓋側（13）の口縁断面形状はやや肥厚している。加えて口唇部に刻目を加える。口縁下部に突帯が１条巡る。最大胴部径は器高の半分よりも上に来ており、下部がゆるやかながらも細くなる印象を受ける。底部は上げ底で、縁辺はやや分厚い。調整は内外ともに斜め方向のハケ目が残る。

主棺となる中型甕（14）は口縁がやや肥厚するものの内部への張り出しは弱い。底部を欠くので実際のところは不明であるが、蓋と同じ上げ底のものである可能性が高い。



第 12 図　３号甕棺実測図

4　4号甕棺（第13，14図）

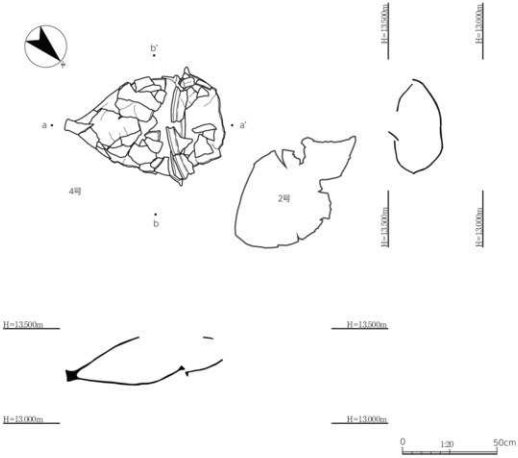
（1）出土時の状況

２号甕棺の南側に隣接する。確認時既に圧壊の様相を呈しており、特に蓋側の破損が大きい。ただし２号との切り合いで生じたものとは考えにくく、やはり１・２号と同様、異なるタイミングで埋設されたであろうにも関わらず、お互いに干渉しない程度に配置している点は注目したい。組み合わせは中型の甕と鉢形で、出土時の図面を見る限りではあまり大きさに差がないように感じていたが復元を経て実測してみると鉢形の方がやや大きく、蓋が甕をはみ出す格好になるようである。組み合わせ部分の大きさが異なる場合、隙間に粘土が充填されるが特記されていないためこの場合は確認されなかったようである。

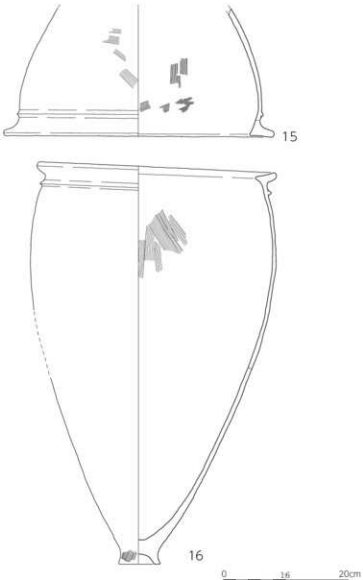
（2）遺物の特徴

中型の甕（16）と鉢形（15）の組み合わせである。（16）は３号甕棺の胴部をさらに長くしたような形状でありつつ最大胴部径の位置は変わらないため、胴部中頃にいたって急激に細くなっていく印象が強い。鋤先状口縁らしい口縁断面となっており、３号甕棺と比べて薄形である。口縁下部に突帯を１条巡らし、底部は上げ底である。上げ底部の厚みは３号甕棺に比べて薄手で立ち上がりが明確である。器面調整はハケ目及びナデ以外で特筆するものはないが、概して丁寧である。

鉢形は前述したように主棺と思われる中型甕の口径よりも一回りほど大きい。甕同様鋤先状口縁をもち口縁下部に突帯を１条巡らせる。底部形状は破損のため不明。ただし胴部の膨らみ方を見るに１号甕棺の鉢形と同じ形状であると推定するが、１号の口縁は明確なＴ字形であるのに対し４号の方はどちらかと言えば鋤先状に近い。



第13図　4号甕棺出土状況図



第 14 図　4 号甕棺実測図

第 3 表　甕棺観察表

検出番号	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	墓種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	最大径 (cm)	胎和材	色調 (外)	色調 (内)	調整 (外)	調整 (内)	焼成	備考
3	1 号甕棺			弥生土器		袋棺	口縁～胴部	86.5	86.7	15.8	-	長石、雲母	明赤褐 5YR3/6.8	橙 5YR7/6.8	ナデ、ハケメ	ナデ	良好	開部に使用 1 条
10				土器		土器	口縁～胴部	68.9	113.2	15.8	71.3	長石、雲母	橙 5YR7/6.8	橙 5YR7/6.8	ナデ	ナデ	良好	開部に使用 2 条
12	2 号甕棺			弥生土器		袋棺	口縁～胴部	35.8	128.52	-	77.8	長石、角閃石、雲母、赤色粒子含む	橙 5YR7/6.8	橙 5YR7/6.8	ナデ、ミガキ 煤付着～ミガキ	ナデ、ミガキ	良好	開部に使用 1 条
17				土器		土器	胴部～底部	-	133.97	6.3	45.3	長石、角閃石、雲母、赤色粒子含む	橙 5YR7/6.8	橙 5YR7/6.8	ナデ、ミガキ	ナデ、ハケメ	良好	開部に使用 2 条
62	3 号甕棺			弥生土器		袋棺	口縁～胴部	46.7	92.4	8.6	38.6	長石、石英、角閃石、雲母、赤色粒子含む	にぶい橙 5YR7/3.4	にぶい橙 5YR7/3.4	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	良好	開部に使用 1 条 口縁端部に粘土貼
64				土器		土器	口縁～胴部	126.45	(49.6)	-	(46.8)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色粒子含む	浅黄橙 2.5Y8/3.8	にぶい黄橙 10YR7/3.8	ナデ、ハケメ	ナデ	良好	開部に使用 1 条
66	4 号甕棺			弥生土器		袋棺	口縁～胴部	42.8	126.41	-	-	長石、石英、角閃石、雲母、赤色粒子含む	橙 5YR7/6.8	橙 5YR7/6.8	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	良好	開部に使用 1 条
68				土器		土器	口縁～胴部	28.2	83.8	8.7	38.9	長石、石英、角閃石	浅黄橙 10YR8/3.8	浅黄橙 10YR8/3.8	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	良好	開部に使用 1 条 ※底部底面に無塗あり

第５節　弥生時代の遺物

甕棺に伴って弥生時代の遺物も出土した。ただし全体の量としては少なく、古墳時代のそれと比べて低調のように思われる。

1　土器

（1）高坏（第 15 図）

17 は高坏の口縁部である。坏形状はやや屹立する体部に肥厚する平口縁で内部にも張り出す。破片であるため全体像は不明である。

（2）甕（第 15 図）

２点図示する。18 は高坏の 17 と似た口縁形状を持つ甕である。やや肥厚し内側が内傾する。

19 はやや肥厚するが内側の張り出しを持たない口縁部の甕である。若干内側が内傾する。

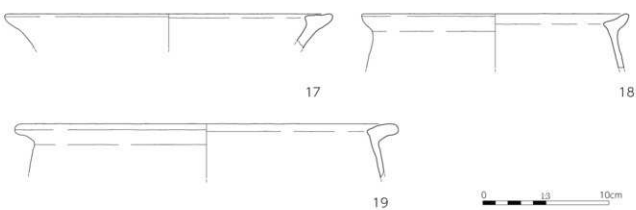
2　石器

磨製石斧（第 16 図）

20 は安山岩製太型蛤刃の磨製石斧である。粗い調整で大まかな形に整えた後、研磨により断面楕円形の大型石斧に仕上げる。刃部方向からの加撃に伴う折損を起こしており、使用の結果と考えられる。

遺物の特徴から見れば、弥生時代の遺物は中期中頃～後期はじめあたりと見られるが、数が少なく、はっきりしたことが言えないのが実情である。ただし、後述する古墳時代の遺物構成も含めてであるが下六嘉遺跡群 1901 地点におけるそれと非常に似通っていることは特筆すべきであろう。

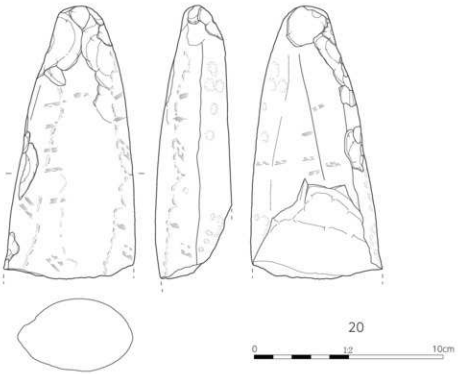
また、1901 地点では確認できなかった甕棺の存在をこちらで確認したことも同じ遺跡群にありながら尾根頂部付近（1901）と裾部付近（9801）との立地の差なのか、興味深いところである。



第 15 図　包含層出土遺物実測図（弥生時代・土器）

第４表　弥生土器観察表

挿図番号	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
17	－	－	1-2	弥生土器	－	高坏	口縁～坏部	(26.6)	(2.7)	－	長石、角閃石、雲母、輝石土粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	ナデ	ナデ	良好	
18	－	－括	弥生土器		甕	口縁～胴部	(21.3)	(4.3)		－	長石、石英、角閃石、輝石土粒	黒褐 Hue7.5YR3/1	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	
19	－	－	1-2	弥生土器		甕	口縁～胴部	(26.4)	(4.3)	－	長石、角閃石、雲母	橙 Hue7.5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ	良好	



第16図　包含層出土遺物実測図（弥生時代・石器）

第5表　弥生時代石器計測表

挿図番号	調査区	遺構	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
20	9801	－	1～2	太型蛤刃石斧	14.59	7.00	4.14	496.94	刃部欠

第6節　古墳時代

法面中から出土したもので、一部は甕棺に混ざって出土したようにラベル上ではなっている。ただ、遺物を見ると明らかに甕棺と同時期の遺物ではないものが多く含まれており、以下で取り扱う古墳時代の遺物もその一部である。

そのため、詳細な出土状況は不明であるが、おおかた包含層中に含まれていたものが工事やその他営力を受けて一部が甕棺内に進入したものと思われる。

また、土器に伴って多くの土製品を確認した。

1　土師器（第17図）

（1）高坏（21～33）

器種として高坏が非常に割合が多い。さらに脚部が多く見られる一方で坏部がほとんどない点も特徴である。限定的な調査区であるため割合についての言及は避けるが、高坏が目立つのは事実である。

概して小形のものが多い。主立ったものを個別に見ていくと21はやや分厚な坏部で立ち上がり付近で段を有する。外器面は縦のち横方向のハケ目が認められる。折損面に二次焼成の痕跡が認められる。22は坏部を欠損するが台付鉢状に近いものと思われる。脚の裾部を欠損する。

（2）甕（34）

図示できるのは1点と少ないが34は小形の甕である。外器面は縦方向のハケ目、内器面はケズリ痕が残る。口縁付近はナデているものの全体として調整はやや粗い。

（3）鉢（35）

35は円形の鉢である。胎土に混和材が多く含まれており、やや粗い印象を受ける。その割に内器面は化粧土が塗られ丁寧にナデているため外器面の粗さとは対称的な印象である。

（4）小形丸底壺（36）

36はやや分厚な小形丸底壺である。外器面底部付近は横方向、胴部中頃は斜め方向、肩から口縁にかけては斜め方向のハケ目のちナデ消している。内器面は指の跡が複数残っておりやや粗めの印象を受ける。

（5）甑（37）

37は甑の桟と思われる。

2　石器（第18図）

出土した石器の多くは特徴に乏しく、明確に年代を特定できる器種以外については、生活用具が多く残る時代に紐付けている。

（1）砥石

形状や大きさによって設置して使用するもの（38、39）と携帯性を意識したもの（40）とに分かれる。38は平面的なやや薄手の安山岩を使用したものであり、両面に研磨で生じた凹みを生じる。直線的な縁辺部に対して斜方の研磨痕であるので、実際はこの運動方向に沿った設置法であったのかもしれない。

39は太形長方形の砥石であったものが両端を欠損したものである。この形状の砥石は中央付近が大きくえぐれて分銅状になっていることがあるが、これには短いためか大きく反る部分が見当たらない。

40は38と比べて小さく、39と比べて薄く、と両者の特性を持っているものであり携帯性を意識した砥石であると判断したものである。面積の大きい平坦面を主に使用したと思われるが、側面についても使用した結果直線的な縁辺部を呈する。

3　土製品（第20～28図）

土器に伴って多くの土製品が出土している。一部は甕棺内から出土したとあるが、甕棺の項で述べたとおり埋土の中頃から出土していることから後世の混入と判断する。

（1）人形（41、42）

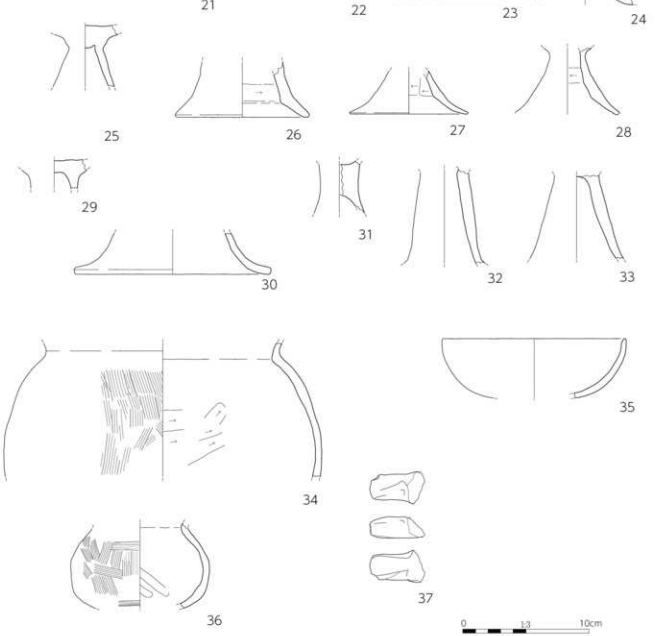
2点出土している。

41は顔の表現がはっきりとした人形である。帯状の土塊を折りたたんで棒状にした痕跡が脚部内側に見られる。本来これは調整により消されるものであろうが、その部分を省略するなど手捏ねらしさが垣間見える。頭部は作り込まれており、耳・鼻梁をつまみ上げて作り出し、工具の刺突により目・鼻腔・口を作り出している。首は頭部分離を防ぐためかあまり明瞭ではないが、指先及びヘラ状工具のケズリにより胴部との区別が計られている。一方で胴部以下は、顔

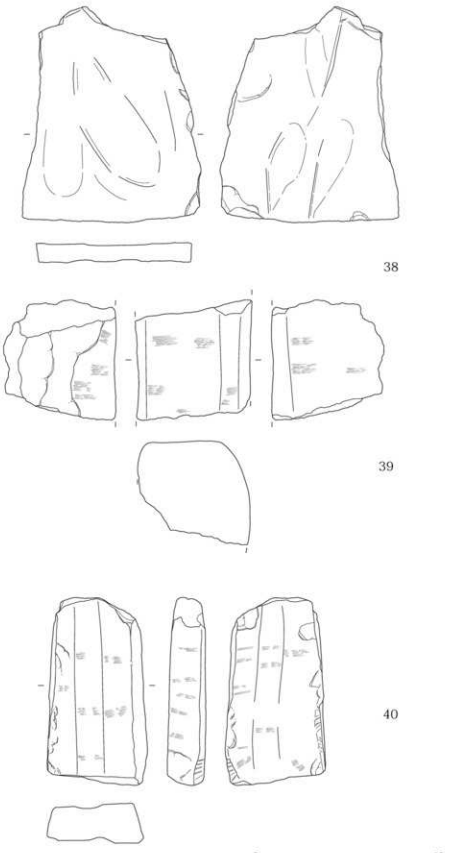
の詳細さに比べて足は簡素であり、背に至っては指頭圧痕が明瞭に残り、脚は足先を簡略に曲げて平たく伸ばしたほかは特に表現がなく、極めつきには手がない。また、意図的なものか不明であるが、両足の間には会陰部状の穴が穿たれている。表現によるものか、設置の際に地面に立たせる目的で穿ったものの可能性もある。性差表現がないため性別については不明である。

42は、男性の人形土製品である。41に比べて調整の粗さも相まってごつごつとした印象を受ける。頭部を欠いているため説明は胴部以下となるが肩らしきものと胴のくびれ、陰茎を表現しており男性と判断される。

脚部は、粘土紐が折りたたまれて棒状となるが先述のものと同様に内側の調整が省略され、境目が残る。足先は、親指の腹と人差し指の第1～2関節あたりで挟み込むようにして平たく



第17図　包含層出土遺物実測図（古墳時代 - 土師器）



第 18 図　包含層出土遺物実測図（古墳時代 - 石器）

第６表　古墳時代土師器観察表

挿図番号	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
21	-	-区	-	上層部	古墳	高坏	坏部	-	(3.4)	-	長石、角閃石、雲母	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	橙 Hue7.5YR6/8	ナデ、イボキ→ケズリ	ナデ	良好	内、内面部に煤付着
22	-	-区	-	上層部	古墳	高坏	坏部～脚部	-	(2.6)	-	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	浅黄橙 Hue10YR8/3	浅黄橙 Hue10YR8/3	ナデ	ナデ	良好	
23	-	-	1-3	上層部	古墳	高坏	脚部～底部	-	(2.9)	(8.2)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	良好	
24	-	-	1-3	上層部	古墳	高坏	坏部～脚部	-	(8.3)	-	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/2	灰黄 Hue5.2Y7/2	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	良好	
25	-	-	1-2	上層部	古墳	高坏	坏部～脚部	-	(4.6)	-	雲母	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ	ナデ	良好	
26	-	-	1-3	上層部	古墳	高坏	脚部～底部	-	(4.4)	(10.6)	角閃石、雲母、赤色土粒	灰白 Hue10YR8/2	灰白 Hue10YR8/2	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	良好	
27	-	-	1-2	上層部	古墳	高坏	脚部～底部	-	(3.4)	(8.4)	長石、角閃石、雲母	黄橙 Hue10YR8/6	黄橙 Hue10YR8/6	ナデ	ナデ、工具による調整	良好	
28	-	-	1-3	上層部	古墳	高坏	脚部	-	(5.5)	-	長石、角閃石、雲母	明褐灰 Hue7.5YR7/2	褐灰 Hue7.5YR6/1	ナデ	ナデ、工具による調整	良好	
29	-	-	3	上層部	古墳	高坏	坏部～脚部	-	(2.2)	-	長石、角閃石、赤色土粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	ナデ	ナデ	良好	
30	-	-区	-	上層部	古墳	高坏	脚部～底部	-	(3.3)	(12.6)	角閃石、雲母、赤色土粒	にぶい橙 Hue10YR7/3	にぶい橙 Hue10YR7/3	ナデ	ナデ	良好	
31	1号建物		-	上層部	古墳	高坏	脚部	-	(4.7)	-	雲母	浅黄橙 Hue10YR8/3	浅黄橙 Hue10YR8/3	ナデ	ナデ	良好	柱内埋土に混入
32	-	表採	-	上層部	古墳	高坏	脚部	-	(7.4)	-	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/3	橙 Hue5YR7/8	ナデ	ナデ	良好	
33	-	-	3	上層部	古墳	高坏	脚部	-	(6.7)	-	長石、石英、角閃石、赤色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5.5YR6/8	ナデ	ナデ	良好	内面部にケズリ痕あり
34	-	-	1-3	上層部	古墳	壺	頸部～脚部	-	(16.7)	-	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	橙灰 Hue5/2	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	良好	内部部に煤付着
35	-	表採	-	上層部	古墳	甕	口縁～脚部	(14.4)	(4.7)	-	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/8	ナデ	ナデ	良好	
36	-	-区	-	上層部	古墳	小型丸底壺	頸部～脚部	-	(6.4)	-	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	灰白 Hue10YR8/2	ナデ、ハケ目	ナデ、指頭圧痕	良好	
37	1号建物	-	-	上層部	古墳	鞴	羽	最大幅 3.5cm	最大長 1.3cm	-	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	柱内埋土に混入

第７表　古墳時代石器計測表

挿図番号	調査区	遺構	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
38	9801	－	1～2	砥石	11.45	9.51	1.12	182.57	板石状
39	9801	－	1～2	砥石	6.37	6.20	5.98	336.01	両端欠
40	9801	－	表採	砥石	9.95	5.33	2.09	174.47	中央に溝状の凹み

伸ばすことで表現する。なお、太もも～胸部及び背面には上下方向のハケ目が残る。

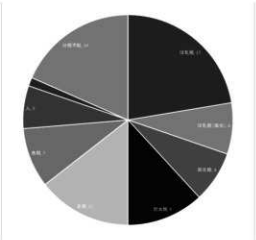
また、1と同様に手は表現されていないほか、臀部に棒状工具で凹みを作り出されている。これも設置時の支えを入れるもののためか。

ちなみに欠いた頭部の境界付近は折損痕から判断するに両肩を巻き込みつつ一様に折れている。偶発的ではなく意図的に頭部を欠くものか。

（2）動物形（43）

1点出土している。棒状の土塊を曲げて頭部としつまみ上げて鶏冠状に尖らせ、前方も合わせてつまみ上げたのち口と鼻を分離させるように切り込みを入れてある。首は頭部を折り曲げて作った部分がそのまま残置され、肩にかけて異様に拡がる突起状のものを認める。胴部も頭部と同様に粗く手捏ねで上方に湾曲した背部と腹側に向けてややすぼまる形が表現されている。尾部は胴部からつまみ上げられて平たく長めに飛び出す形状となる。脚部は4本いずれも欠損しており、胴部からつまみ上げられて作り出された腿部は残存する。脚の大部分は別の土塊から接合されたと見られるが、癒合が弱く右前脚を除いては焼成前もしくは焼成中に折損したのではないかと思われる。一方で焼成は良好である。

これらを総合すると細長い頭部と、上方に湾曲する背部、4つの脚、広がった尾を持つ。これらの特徴からウマなどの哺乳動物を思い浮かべるが、特異点としては首あたりに拡がる襟状の突起である。この突起により判定に際し大きな障害となり、結果的にこれが何を模したものかわからない。四つ足でなければ鳥のようにも見え、異形である。



第19図　アンケート結果

ちなみに、令和2年度に速報展を開催し、これら土製品についても速報的に公開を行ったが、その際にこの動物形土製品が何に見えるかについて来場者アンケートを取ったところ40人から回答を得た。

動物、カエル、木、カワウソ、オタマジャクシなどの回答が寄せられ、ペンギン、カモノハシなど当時の人が出くわさなかったであろうものの回答も見られた。

回答を細々とまとめると取り留めないので、大括りでどの種に属するかという観点で集計したものが第19図である。ほ乳類が最も多く、次いで魚類、両生類、爬虫類とならぶ（第19図）。

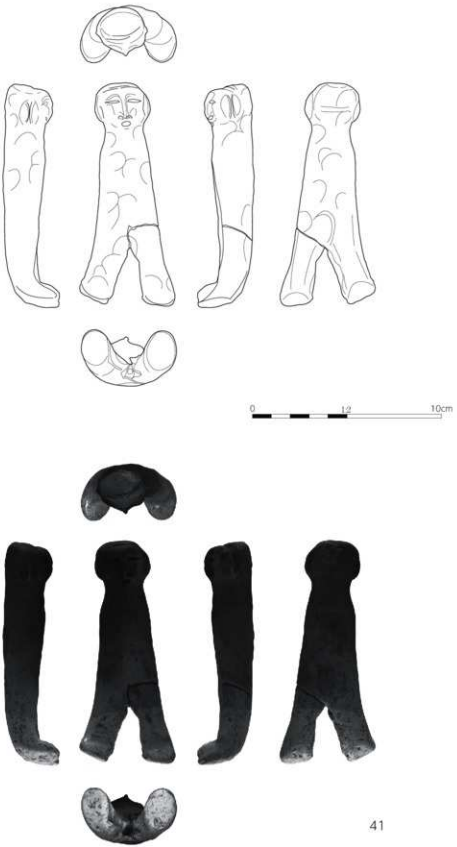
このアンケートを取った理由の一つとして、何も先入観を与えない場合外見の印象のみで判断した結果はどういったことになるのかという興味で実施したものである。そうした場合、自分の引出にあるイメージから最も近いものを回答として導き出すこととなるが、本来日本に存在しないものについて言及するなど自分のイメージの元となる情報源（特にテレビなどの映像媒体により）に左右されることが大きい傾向にある。

結果として当時の人間が何を模したものであるのか判断が付かなかったが、個人的にはトサカ状の頭部や先細った口、尾状の飛び出しなどを考えてニワトリなどの鳥であると言いたいがではなぜ四つ足なのかという点について説明が付かず相変わらず悶々としているところである。

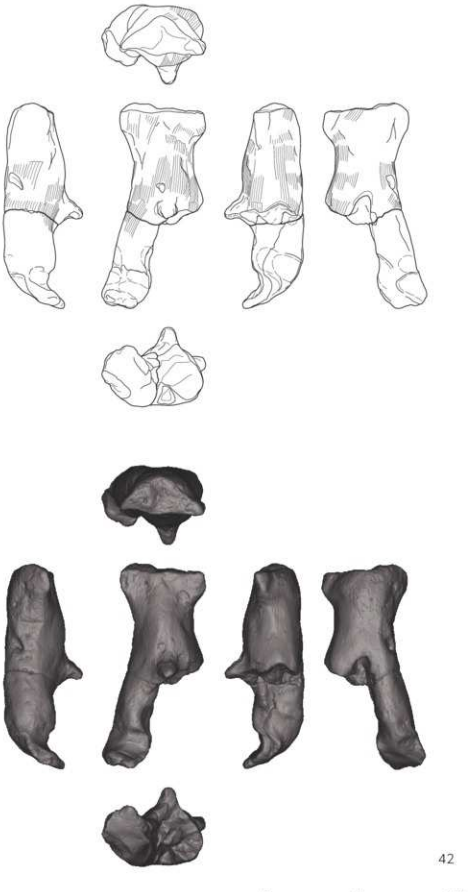
（3）鉄斧形（44）

1点出土している。44は、初め形状不明の土製品もしくは組み合わせ型のものであると思っていたが、下端部が生きており先端が尖るように作り出されていること、裏面の返り状作り出し部が袋部を模したものであることに気づき、鉄斧形とした。

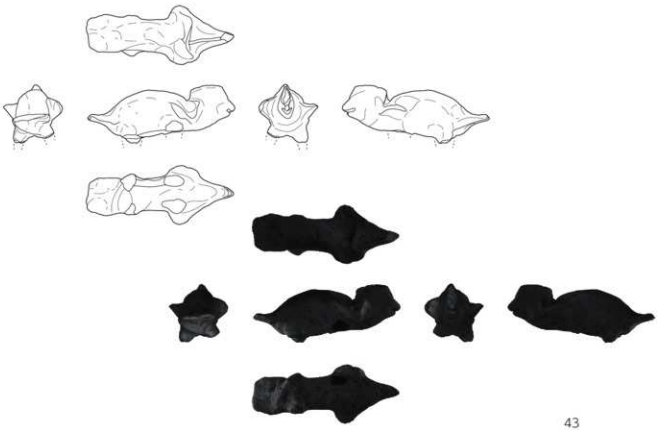
刃部は肩は無く裾広である。胴部からつまみ上げられて平坦・幅広に整形される。袋部は刃部同様胴部からつまみ上げて折りたたむことで袋部分を表現している。

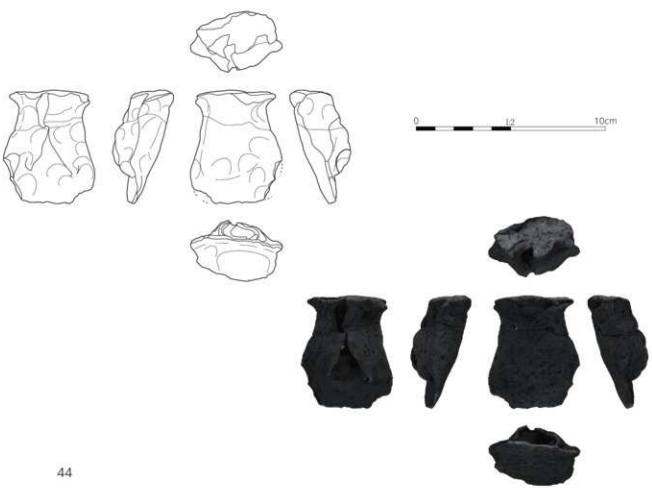


第 20 図　人形土製品実測図・オルソ展開図



第 21 図　人形土製品実測図・オルソ展開図





第 22 図　土製品実測図・オルソ展開図

（4）竪杵形（45、46）

２点出土している。45 は一見すると何かの脚部と捉えられがちであるが、両端は生きており、平坦面を意図的に作り出していること、中央付近がくびれるように作られていること、両端は肥大するようになっている点から竪杵を想定したものであるとした。

46 についても同様に脚部である可能性もあるが、意図的に上部を細めており接合部分においてはさらに小さくなることから脚部ではなく杵状土製品とした。

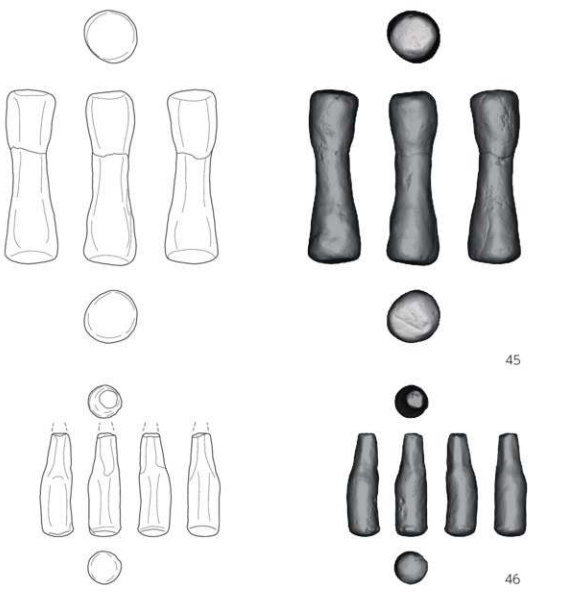
（5）鏡形（47、48）

２点確認された。甕棺埋土中からとあるが、先述したとおり甕棺中には多量の遺物が紛れ込んでいる。47 は円盤状に仕上げた粘土板の中心部をつまみ上げて鈕を模した部分を作り出す。鏡面にあたる部分はやや肥厚して凸面状を呈するが意図的なものであるかは不明である。

48 は 47 に比べるとやや簡素化されており突起を有する円盤状のものである。周囲を大きく欠くため全形は不明であるが、47 と同様であれば円形をしていたものと思われる。鏡面は平坦で、凸面を形成している 47 と対照的である。

（6）鉢形（49）

49 は口縁が直立する鉢形で輪積み整形で口縁付近まで作り出し、その後口縁をつまみ上げて口唇部を細く仕上げている。内器面はナデて器面を整えている。外器面も同様にナデている



第 23 図　土製品実測図・オルソ展開図

が内側に比べて粗く、指頭圧痕が一定方向で回転されたように残っている。底部は工具で切り離された後その痕をナデ消している。

（7）甕形（50）

50は胴部が孕み、口縁が外反する甕形である。輪積みにより整形され、口縁部を屈曲させるようにつまみつつ首を作り出すために外反させる。両器面ともに比較的丁寧にナデられている。胎土に褐色土粒を含む。

（8）器台形（51～54）

51～54は器台形土製品である。51は一見すると縄文時代の耳栓のようである。ただ、粘土紐を雑に折りたたんで作っているような手捏ねで整形も粗く、器台形として考えるのが妥当と判断した。

52は高坏形の可能性もある。脚裾の辺りに刻目状のものがいくつか施される。

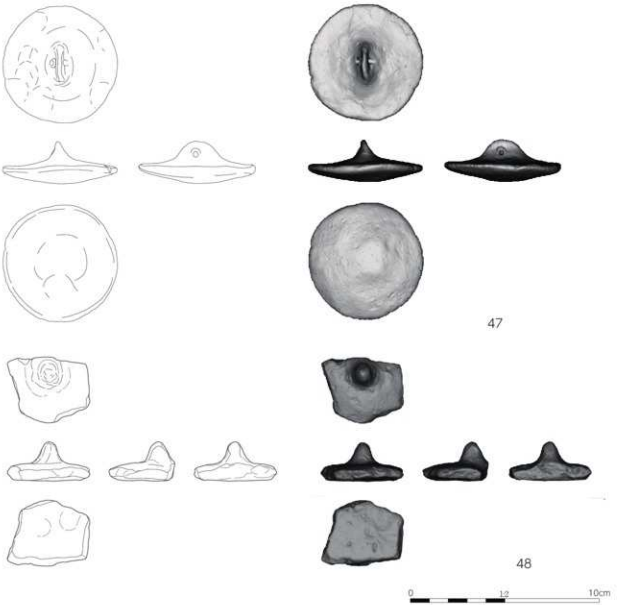
53、54は筒形器台を模したものである。上述した2点については中空でまさに筒形である。

（9）土器形（55、56）

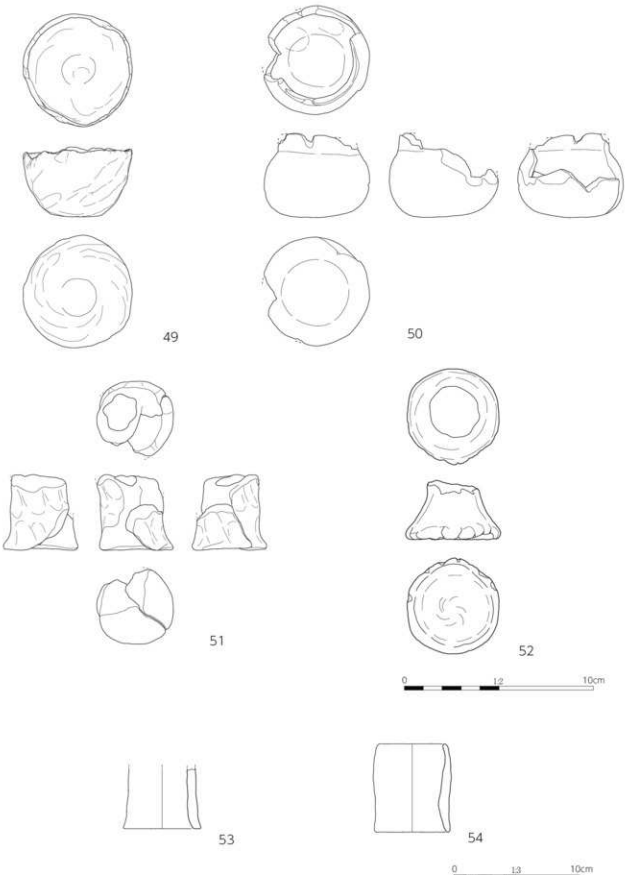
55、56は土製品とするのを迷ったものであるが、土器としては形状・大きさの面などで少し合わない気もするので土製品の一部に含めた。

55はやや尖底気味の土器形土製品である。器面の内外に縦方向のハケ目が残る。

56は尖底の土器形土製品である。底部の先



第24図　土製品実測図・オルソ展開図



第 25 図　土製品実測図

端を欠損する。外器面には明瞭なハケ目が残る。

(10) 匙形（57、58）

匙形土製品であり、57は匙部、58は柄部である。双方ともに手捏ねの土製品で、57の匙部は深い卵形を呈し、匙と言うよりも杓に近い形状である。胎土は他の弥生土器と似る。58の柄部は57に比べると浅型の匙部を持つか接合面で折損したか判断に迷う。柄の先端も破損しており、全長等は不明である。

(11) 不明土製品（59～77）

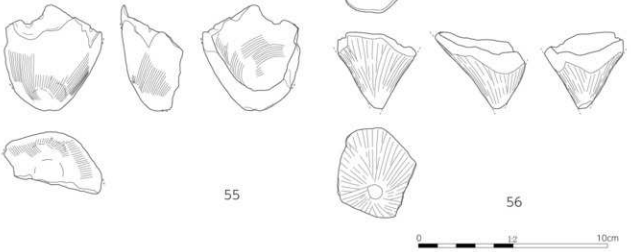
上述してきたようにある程度形状が推測できるものについては何らかの分類をすることができたがこれらに当てはまらない土製品も数多く存在する。

59～70は棒状のものであるが、何か動物の脚とするには華奢であり、直線的である。土錘かと思えば穿孔はなく、結果としてよくわからない。何かの形状を形作る部品であると思われるが帰属する対象物が見当たらないなどという理由で今回不明とした。面的に調査されていればこれら部品も帰属先が見つかったのかもしれない。

71、72は羽口形とも考えられるものである。土錘に比べて径が大きく、さらに孔も非常に大きい。似た形状で器台形としたものに近いがそれにしては径が小さい。ふいごの羽口がそうしたものの中でもっともしっくり来るものであるが、熱を受けて変状する形跡が認められないため実用されたとは考えがたく、土製品に含めた。73は元々何か別のものに貼り付けられていたものが剥落したものと思われるものである。

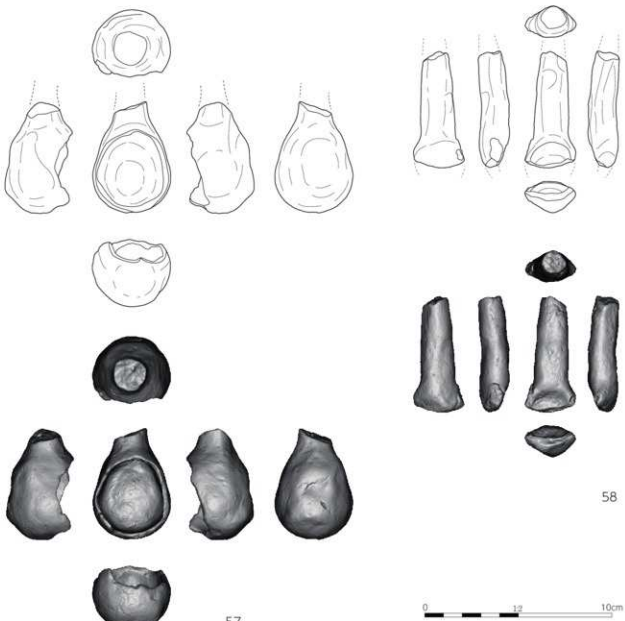
剥落したためか折損によるものかは不明であるがこれだけの大きさがありながら全体を想像することが難しいほどにわからない。中央に突起状のひだが見られるが、人面であれば鼻のようなものか、人形であれば陰茎かと推測するが決め手を欠く。

74～76は突起を有する土製品である。75については47、48と同様鏡形土製品の鈕部分とも考えられるが、突起の裏側は土器の内器面のようにも見え、第25図で挙げた器形の底部のようでもある。76は突起状に飛び出たものを中心にもつもので大部分を欠損している。突起の周囲は中空の管状のものが欠損しているように見え、ともすると高坏脚部の付け根かと思える。ただ、そうなれば坏部の接合面となる裏側が一部折損していないなど器形としておかしなことになることから不明とした。

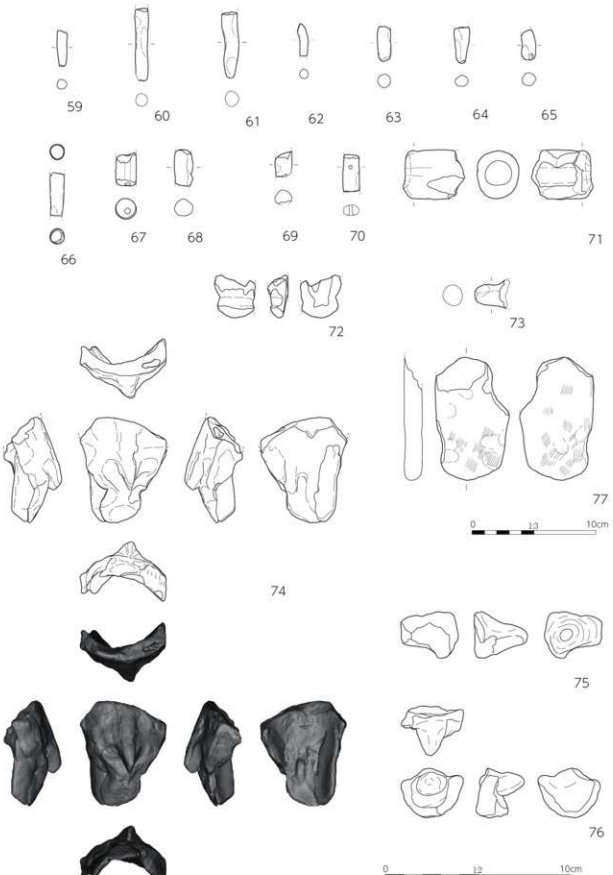


第26図　土製品実測図

77は板状の土製品であり、上半を欠くため全形がわからない。これだけ胎土が異なっており、実際のところ古墳時代に属するかについても断定できない。あえて思いつくものとしては土偶なのであるが、欠いた部分がない限りは現時点では不明とせざるを得ない。本地点付近にカキワラ貝塚が存在するのでこちらの可能性も否定できないでいる。



第27図　土製品実測図・オルソ展開図



第 28 図　土製品実測図・オルソ展開図（74・75・76 は 1/2、その他は 1/3）

第８表　古墳時代土製品観察表

図版番号	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	種別	器形	最大幅(cm)	最大高(cm)	胎土・色調	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
41	－	－	－	土製品	古墳	人形	完形	3.9	11.6	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/3 にぶい黄橙	－	ナデ	－	良好	頭部表現
42	－	－	－	土製品	古墳	人形	脚部	5.6	24.0	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	2.5Y6/1 黄灰	－	ナデ、ハケ目、指頭押圧	－	良好	脚部表現
42	－	－	2-2	土製品	古墳	動物形	完形	3.1	7.0	長石、角閃石、雲母	10YR6/3 にぶい黄橙	－	ナデ、ハケ目、指頭押圧	－	良好	頭部動物、胴部に海綿状突起、口部開、脚部欠損
42	－	－	2-2	土製品	古墳	鶴形埴輪	完形	4.5	9.0	長石、雲母、赤色土粒	2.5Y6/2 灰黄	－	ナデ、指頭押圧	－	良好	鶴はハケ目が多い。口部開
42	－	－	2-2	土製品	－	勾玉	完形	2.93	8.16	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	－	ナデ、指頭押圧	－	良好	両面
46	1号墳周	－	－	土製品	古墳	勾玉	－	1.68	(1.47)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	－	ナデ、指頭押圧	－	良好	穴は両面とも貫通
47	1号墳周	－	中層	土製品	古墳	勾玉	完形	4.18	3.28	長石、雲母、赤色土粒	5YR6/3 にぶい橙	5YR6/3 にぶい橙	ナデ、指頭押圧	ナデ	良好	穴は両面とも貫通。指頭圧痕多。赤色土粒多い
48	1号墳周	－	－	土製品	古墳	勾玉	－	(3.00)	2.10	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	ナデ	ナデ	良好	穴は両方向分有り。指押痕跡顕著
49	－	－	2-2	土製品	－	鈴状	口縁～底部	6.0	3.4	角閃石、雲母	5YR6/3 にぶい橙	5YR6/3 にぶい橙	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	良好	外面赤彩？痕
50	－	－	2-2	土製品	古墳	壺形	口縁～底部	5.7	4.9	長石、石英、雲母、赤色土粒	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ、指頭圧痕	良好	外面赤彩痕が一部残っているが不明瞭あり
51	－	－	2-2	土製品	古墳	器台形	脚部～底部	－	(3.7)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	ナデ、指頭圧痕	ナデ	良好	外面赤彩痕
52	－	－	2-2	土製品	古墳	器台形	脚部～底部	－	(3.4)	長石	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	良好	穴は不明
53	－	－	2-2	土製品	古墳	器台形	口縁～底部	－	(4.4)	長石、角閃石、雲母	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	良好	痕跡
54	－	－	2-2	土製品	古墳	器台形	口縁～底部	16.32	7.9	長石、雲母	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	良好	痕跡
55	－	－	2-2	土製品	古墳	土器台	脚部～底部	－	(4.9)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	5YR7/3 にぶい橙	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	良好	外面赤彩痕とケズリ痕あり
56	1号墳周	－	－	土製品	－	土器台	底部	－	(2.7)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y7/1 灰白	ナデ、ハケ	ナデ	良好	穴は両方向とも貫通。外面赤彩痕跡多
57	1号墳周	－	中層	土製品	古墳	器形	－	4.48	(3.05)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	良好	穴は両方向とも貫通
58	1号墳周	－	中層	土製品	古墳	器形	脚	3.73	8.40	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	ナデ	ナデ	良好	穴は両方向とも貫通
59	1号墳周	－	第7層	土製品	古墳	不明	－	4.03	(2.05)	長石、角閃石	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。棒状
60	1号墳周	－	第7層	土製品	古墳	不明	－	1.17	(3.74)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。棒状
61	－	－	第7層	土製品	古墳	不明	－	1.48	(3.25)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	ナデ、指頭圧痕	－	良好	棒状
62	1号墳周	－	第7層	土製品	古墳	不明	－	0.83	(1.36)	長石	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。棒状
63	1号墳周	－	－	土製品	古墳	不明	－	1.13	(2.75)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。棒状
64	1号墳周	－	第7層	土製品	古墳	不明	－	1.29	(2.07)	長石、石英、角閃石	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。棒状
65	1号墳周	－	第7層	土製品	古墳	不明	－	1.17	(3.14)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR7/3 にぶい黄橙	－	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。棒状
67	1号墳周	－	－	土製品	古墳	不明	－	1.01	(2.02)	長石、角閃石、雲母	10YR6/2 灰黄褐	－	指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。小石混在
68	1号墳周	－	中層	土製品	古墳	不明	－	1.51	(1.87)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	－	ナデ	－	良好	穴は両方向とも貫通。棒状
69	1号墳周	－	第7層	土製品	古墳	不明	－	1.41	(3.07)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	5YR6/3 にぶい橙	－	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。棒状
70	1号墳周	－	第7層	土製品	古墳	不明	－	1.38	(2.94)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	5Y6/2 灰白	－	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴は両方向とも貫通。穿孔
71	－	－	2-2	土製品	古代	紡錘車	－	3.40	(5.80)	石英、角閃石、雲母、赤色土粒	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	指頭圧痕	ナデ	良好	穴貫通。二次焼成
72	－	－	2-2	土製品	－	不明	－	(2.20)	(3.80)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	ナデ	ナデ	良好	
73	1号墳周	－	－	土製品	古墳	不明	－	2.26	(2.65)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	5YR6/3 にぶい橙	－	ナデ、指頭圧痕	－	良好	穴手前？
74	1号墳周	－	第7	土製品	古墳	不明	－	4.7	5.6	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	良好	穴は両方向とも貫通。表面剥離部あり
75	－	－	－	土製品	古墳	不明	－	2.8	5.1	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	ナデ	ナデ	良好	表裏穴
76	－	－	－	土製品	古墳	不明	－	(5.30)	(2.55)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色土粒	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	ナデ、指頭圧痕	ナデ、ハケ痕？	良好	穴は一方向？
77	－	－	3	土製品	古墳	不明	－	6.02	(9.60)	長石、角閃石、雲母、赤色土粒	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y6/1 黄灰	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	良好	棒状

第4章 総括

第1節　9801 地点の調査成果

1　調査成果について

（1）調査の成果

町道拡幅時に甕棺が露出したことに伴う不時発見で調査を実施したものであるため、工事に直接関係のある部分に調査区が限られていることからあまり多くのことが言えないが、甕棺が比較的まとまった位置に4基確認され、これが下六嘉丘陵上である程度の精度ではあるが位置が特定できる形で記録が取られた初の例となる。

また、甕棺とともに混ざり込みではあるが古墳時代の土器に伴って土製品が多く出土し、人形や鏡形土製品など具象的なものやよくわからない動物形など多くのバリエーションに富むことも明らかとなった。惜しむらくは工事に伴って法面を形成する際に包含層を切り下げているためこれら土製品が面的に出土することなく甕棺埋土中から出てくるなどして原位置を留めていなかったことであるが、今後この周辺からこうした土製品を含む何らかの遺構が確認される可能性は十分に考えられることである。土製品については次節で詳細を扱うこととする。

（2）9801 地点の地形

下六嘉遺跡群は丘陵の尾根から裾まで幅広い範囲に設定されている遺跡である。先だって調査された 1901 地点は尾根の頂部付近にあり、今回の 9801 地点は裾部の南西端付近にある。標高差として約5 m近くであり、下六嘉丘陵自体が南に向かってはそれほど急な斜面を有していないこともあってなだらかな地形を形成している。

部分的な調査が行われたに過ぎず集落域の検討などができる段階には至っていないが、尾根頂部と裾野での明確な違いの一つとしては 1901 地点では弥生時代の生活に関連する土器群が多く見られた一方で 9801 地点ではそれがほとんど見られず甕棺が見られること、古墳時代においては双方ともに生活用具の出土が見られるが 9801 地点は高坏や土製品など構成に偏りが見られることなどが違いとして挙げられるだろう。もちろん限定的な調査区であるため、この傾向はその一端を示しているだけに過ぎない可能性は否定できない。

ただ、土製品との関連性に注目した場合、水辺（湧水地点）が近い裾野という場所は、後述するような場の機能を持つものとして集落域でも少し特殊な場所であったのではないかと推測するものである。

2　甕棺の時期について

4基確認されたうち、大型1基、中型3基という構成である。

（1）大型甕について

1号甕棺は大型甕であり、外に向かって下がり気味の口縁と1 mを超える大型の器体、胴部中頃より下に突帯を有する。口縁下部には突帯が認められない一方でややすぼまるといった特徴を持ち、橋口編年で言うところの北部九州系のＫⅡｃ式ではあるが、Ⅲａ移行期（中期前半後葉）とするのが適当か。これに大形の鉢が組み合わせられる。

（2）中型甕について

2号甕棺は胴が強く張り出し、甕と言うよりは壺に近いほどに口縁下ですぼまる。口縁を打ち欠いているため口縁形状については不

明であるが、甕の口縁を呈するものと思われる資料である。突帯は最大胴部径および肩のあたりに巡らされ、赤彩を有する小形の精製甕と組み合わせられる。時期は1号とほぼ同じと見られるが、大きさの差が成人と小児を分けるものであるかは不明である。

3号甕棺は断面三角形に近いやや肥厚する口縁及び口唇部に刻目が施される。口縁下に突帯が巡り、底部はやや分厚な上げ底である。時期的にはKⅡa（中期初頭）に位置する。1901地点でも中期初頭に属する土器片が出土しており、大きな矛盾はない。

4号甕棺は地方色が強く出ている土器、所謂黒髪式と考えられる。上げ底の底部、胴部中頃まで細身ながら上半はやや張り出す、通常の甕を縦方向に引き延ばしたような器体、内側に傾斜する口縁を持ち口縁下に突帯を巡らせている。1号甕棺の大形鉢と似通ったものを組み合わせているが、口縁の径が合ってない。鉢の形状のみで時期を判断するのはやや困難であるが1号甕棺とほぼ同時期とみて良いと考える。

今回出土した4基のうち、3号甕棺を除いてKⅡc～KⅢa式期（Ⅱc新相）に属し、3号甕棺自体も中期初頭に位置づけられる（第29図）。下六嘉遺跡群1901地点における土器群のピークもそれと同じであり、同時期の土器組成の差は同じ遺跡内において墓域（9801）と集落域（1901）の差が出ているのではないかと推測する。

3　土製品について

（1）本町における土製品

本町で土製品として出土することはたまにあるが、その場合大抵1種類程度のものが1，2点出土するくらいで、今回のように多種多様なものが複数出土するということはなかった。

これだけでも特異ではあるが、繰り返すように出土時の状況がほとんどわからない状態にあったことは残念でならない。

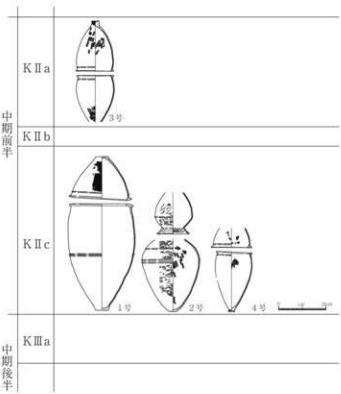
（2）土製品中に含まれる種子圧痕について

土製品という生活とは直接関係しない遺物には、何か特別な意味を持たせるために製作時に何かを混ぜ込むなどの行為が行われていたのではないかとの観点の元、熊本大学の小畑研究室で実施されている土器の3次元CTスキャンによる圧痕調査及び種子同定等を依頼し、性質が特殊な土製品であっても意図的に種子等を混入させた形跡は認められなかったと言う結果を得た。

特殊な遺物に面した際、そうしたものに特別な意味を持たせるために何かを練り込んではいないだろうかと考えるのは、現代人の価値観からの思い込みであったかと自省しているが、いずれにせよ調べた上でそうした事実はない、と断じることが出来たのも一つの成果ではないかと思い直すこととした。

4　下六嘉遺跡群における土製品群の評価

玉名市の両迫間日渡遺跡で今回のものと同時期にまとまった有孔円板や石剣形石製品などとともに手捏ねの土器群が水辺に固まって出土し、水辺における祭祀がそこで行われたことを示すと報告されていることを考えると、現在も湧き続ける湧水地点が目の前に広がる小高い場



第29図　9801地点出土甕棺編年図

所である本地点でも同様のことが行われていたのではないかと考えてしまう。

今回は不時発見であったため面的に調査を展開することができなかったということもあり、加えて甕棺内に遺物包含層の土が流れ込むなど、資料の一括性については不安な点もあるなど今ひとつ確証に欠ける面はあるが、恐らく古墳時代中期に多く見られる祭祀に伴う遺物と見ても良いと考える。一方で石製模造品等における有孔のものについては木の枝等に吊すことを意図しているものと思われるが、今回出土した遺物の多くは孔を持たず、人形においては臀部付近に掘りくぼめた穴状のものがあり、吊すというよりも地面に置く・立てるなどの使われ方をしたのではないかと思われる。

第2節　まとめ

1　下六嘉遺跡群 9801 地点について

町道の拡幅に伴う遺跡の不時発見が契機となり調査が実施された本地点で甕棺と古墳時代の土器に伴って多くの土製品が出土した。

甕棺の年代観から弥生時代中期初頭に始まり中頃をピークとしていることが明らかとなった。甕棺出土の一方で土器の出土は低調であった。

土器としては、古墳時代中期の土器が比較的良く出ている。特に高坏が多いのは特徴的である。また、これらに伴うと考えられる人形等を含めた土製品が多数出土した。

土器と土製品の組み合わせは、玉名市の両迫間日渡遺跡と非常に似通っている一方、有孔円盤や石製品、玉類が出ていないなど組成に差が見られる。これは調査区が限定的であったことが起因している可能性もある。反対に人形や動物形、斧形・竪杵形など形象系の土製品が見られることは本遺跡における一つの特徴であることを指摘できよう。

上述のように限定的な調査区でありながら多くの示唆をもつ調査であったことは言うまでもなく、これが未報告のまま倉庫に埋もれたままにしておくのは些か気が引けたので遅きに失した感はありながらも今回報告するに至ったものである。

2　下六嘉遺跡群について

（1）地点の様相に基づく集落構造

調査としては後発となるが、先だって刊行された 1901 地点の報告書や西光寺遺跡 2001 地点の報告書を通じて下六嘉遺跡群だけでなく付近の予備調査結果なども加わって下六嘉丘陵全体の集落構造が見えてきつつある。古くから住宅が建ち並んでいた区域については Aso-4 風化土壌まで削平されたのち基礎を置いているケースが多く、そうした場所はすでに遺跡が存在していないが、丘陵全体に本来は遺跡が存在していたことを暗示する。

頂部と裾部での標高差があまりなく、緩斜面

でありながら低地とは明確な境界を持つこの丘陵は水害常襲地帯と呼ばれていた本町において数少ない非浸水域である。このため弥生時代においても集落は標高の高い頂部付近に置かれつつも水場のある裾部まで短時間で労せずアプローチできる非常に恵まれた土地である。下六嘉遺跡群はその丘陵の頂部から裾部まで非常に広い範囲を域とするため標高による集落構造の差を遺跡内で見ることができる。

1901 地点と 9801 地点で出土する遺物に差が見られるほか、頂部付近では甕棺墓が確認されなかったこと、裾部では生活に関わる土器が低調であることは場の機能の差と見ることができ、弥生時代における集落域の中心は頂部付近、墓域はその周辺、特に裾部に分布するのではないかと考えている。

一方で古墳時代に入ると裾部にも集落が点在するものと思われ、西光寺を含めた丘陵裾部から土器を伴った住居が確認されることとなる。

（2）遺跡の存続時期

1901 地点の土器組成から弥生時代中期初頭～後期前半、後期後半の断絶を経て古墳時代前期の集落存続を報告したところであるが、今回 9801 地点での出土土器検討を経て、古墳時代中期まで継続しそうであることが明らかとなった。これまで当町では古墳時代中期の集落を明確に捉えたことがなく、近年の発掘調査を経て徐々にそれが明らかになりつつある。

（3）古墳時代中期の集落と墳墓

集落の展開が明らかとなりつつある今、やはり気になる点は下六嘉丘陵における古墳の存在である。対岸の北甘木丘陵や井寺丘陵では古墳時代中期から後期にかけての古墳が確認されてきている。そのほとんどは畑になっているために墳丘や内部主体を失って周溝のみとなっているが、総数で 50 基を超える数から相当な規模であると言え、それを反映する強固な集団の存在を暗示するものである。井寺古墳はその最たるものであり、象徴なのであると考えている。

ところで 1901 地点の報告でも述べたところであるが、下六嘉丘陵には古墳が確認されていない。石棺は下六嘉遺跡群中に見られ、古くから存在が指摘されている所ではあるが、記録が取られていないために詳細については明らかではない。

北甘木丘陵においても発掘調査により箱式石棺は複数確認されており、周溝を持たないものも存在する。そうした場合時期的には弥生時代の終末～古墳時代の始めと位置づけられ、その後の古墳築造へと途切れなく移行していく様相を示すものである。これらの成果については現在整理作業を進めているところであり、順次刊行していく予定である。

再び視点を下六嘉丘陵へと戻すが、こうした古墳群と呼べる規模の古墳が対岸に存在していながら似たような地形の下六嘉丘陵上に存在しないのはどうにも解せない。ただし石棺が存在するということは墳丘を失ってはいるものの中期の古墳が存在するのではないかという気持ちを捨てきれないでいる。それについてはこれからの下六嘉丘陵上での調査で明らかとなってくることであろう。

嘉島町教育委員会 2018『塔ノ木遺跡』嘉島町文化財調査報告書第 3 集
嘉島町教育委員会 2021『六嘉遺跡群 1901 地点』嘉島町文化財調査報告書　第 7 集
玉名市教育委員会 2009『両迫間日渡遺跡』玉名市文化財調査報告第 19 集

図版
Plates

9

10

1号甕棺

11

12

2号甕棺

13

14

3号甕棺

15

16

4号甕棺

PL- 5

縄文土器

弥生土器

古墳時代土師器

古墳時代土師器

甑形土製品

不明土製品

PL- 7

人形土製品

動物形土製品

竪杵形土製品

鏡形土製品

PL- 9

鉢形・甕形土製品

器台形土製品

器台形土製品

土器形土製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもろっかいせきぐん 9801 ちてん
報告書名	下六嘉遺跡群 9801 地点
副　題	町道拡幅に伴う埋蔵文化財調査報告書

シリーズ名	嘉島町文化財調査報告
番　　号	第 10 集
編 著 者	橋口剛士
編集機関	嘉島町教育委員会（嘉島町文化財センター）
所 在 地	861-3106 熊本県上益城郡嘉島町上島 531
発 行 年	2024 年　月

所収遺跡名	所 在 地	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
下六嘉遺跡群	熊本県上益城郡嘉島町上六嘉	32 度 44 分 56.7273 秒	130 度 45 分 58.6711 秒	1998 年 2 ～ 3 月	-	町道拡幅

嘉島町文化財調査報告第 10 集

下六嘉遺跡群 9801 地点

発　行　　令和 6 年 3 月 15 日

編　集　　嘉島町教育委員会
　　嘉島町文化財センター

発　行　　嘉島町教育委員会
　　〒 861-3106　熊本県上益城郡嘉島町大字上島５４５

印　刷　　株式会社　啓文社